

第1回日本高度実践看護学会 参加報告

2025年8月2～3日、神戸国際会議場で第1回日本高度実践看護学会が開催されました。この学会は、2025年4月に日本専門看護師協議会から改組され、新たに発足した学会です。

高度実践看護師（APN：Advanced Practice Nurse）とは、高い専門性と優れた看護実践能力を持つ看護職者を指します。会場には多くの診療看護師（NP）も参加しており、第1回にもかかわらず、この領域に対する関心の高さがうかがえました。ここでは、多くの発表の中から、日本NP学会理事が登壇した4つのセッションをご紹介します。

【パネルディスカッション】APNの臨床活用—管理者として私はこう考える—

福永ヒトミ理事長

（日本医科大学武蔵小杉病院）

「APNの臨床活用 —管理者として私はこう考える—」

講演要旨

日本における高度実践看護師（APN）は、大学院修士課程教育として日本看護系大学協議会（JANPU）によりJANPU-NP および CNS と、日本NP教育大学院協議会（JONPF）による診療看護師（NP）が養成されています。

JONPF では、2008年に養成を開始し現在まで984名が資格認定され、JANPU では2015年に養成を開始し現在までに16名のJANPU-NPが輩出されています。現在、NP(仮称)の国家資格化に向けて2団体で検討を進め、その役割、能力（コンピテンシー）に関して合意に至っております。JONPFの診療看護師（NP）を対象にした調査では、約90%が病院に勤務しており、病院における所属は、看護部や医局のほか、独立部門を設置している病院など多様です。当院（日本医科大学武蔵小杉病院）では診療看護師（NP）は、看護部に所属し、病棟において一般の看護業務や管理業務に従事しながら、活動日を設けて診療看護師（NP）としての業務を行っています。また、認定看護師（CN）・専門看護師（CNS）・診療看護師（NP）による会議を3ヶ月に1回開催し、活動内容の共有やチーム医療における役割の在り方などについて、高度実践看護職としての看護の視点からの意見交換を行っていることが報告されました。

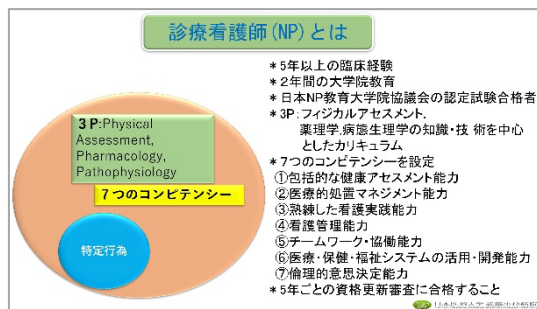


ディスカッション

医師のタスクシフトへの貢献が注目されがちですが、高度実践看護の視点を活用し、一般の看護師の教育・指導などを通して、看護の質向上に大きく貢献していることなど、病院におけるAPNの需要は高いことが示されました。さらに、現行法令下で、包括的指示により相対的医行為を担いながら、看護の視点を持って取り組むことにより、看護の専門職としてタイムリーな医療提供に貢献しています。

看護管理の側面からは、組織のニーズを踏まえてAPNが効果的に活躍できる機会と場を提

供することで、APN 自身の専門的な看護実践をさらに高めることができます。また、APN



から、現場の事例を通して in situ で指導を受けた看護師の学習意欲が高まり、APN と看護師との連携・協働が相乗的に作用し、医療の質が飛躍的に向上することなどから、看護管理者が、APN が専門性を発揮できる適切な配置を行うことにより人材の効率的な運用と組織全体の医療の質向上につながるということが示されました。

【シンポジウム】我が国における APN の未来－融合する知－

本田和也副理事長

(学校法人純真学園 純真学園大学)

「融合する知に向けた対話のはじまり－高度実践看護における NP 教育課程修了者の視点から－」

講演要旨

(冒頭)「例えば、どんな理想も描ける“魔法のペン”があったとしたら、この会場にいる高度実践看護師 (APN) の皆さんは高度実践看護というテーマに対してどんな理想やビジョンを描きますか？」この問いに悩む

こと自体が、私たち APN が“未来に向けて”当事者意識を持ち、臨床現場の課題に照らし合わせながら、自らの理想やビジョンを描き、形にしていくべき重要な課題です。私たちが APN の先を見据えるとき、後進を育成していく責務がそこには生まれます。そのためには、後世の看護職の皆にも愛される、理解される存在にならなければならない、ということが述べられました。

強調して示されたのは、NP 教育課程修了者、専門看護師 (CNS) それぞれの役割や使命感の違いではなく、「この瞬間、そばにいる患者さんに私たちに何ができるのか」といった APN 同士に存在する“共通の志”の表現およびその理解に向けた対話についてです。そして何より、看護職として共闘する存在 (例：看護師特定行為研修修了者や認定看護師) への尊重と主に臨床現場での連携の可能性の探究も重要であるということが述べられました。



APN は、高度化、多様化する医療提供体制の中で、医師と看護師、病院と在宅を緩やかにつなぎ、理想的な医療提供体制の構築に貢献できる存在だと確信できます。NP 教育課程修

実践のなかの融合 = 本質

「あなたはNPですか？CNSですか？」という問いよりも、

あらゆる実践の場で
今、この瞬間に、この患者さんに私（たち）は何ができるか
という問いこそが、本質であるということに気づいた。

了者と CNS が互いに敬意を持ち、耳を傾け、対話を重ねることで、知の融合が生まれ、現在医療における APN としての新たな価値が創出されると期待すると述べられました。

（最後に）限られた時間の中ではありますが、診療看護師（NP）としての実践経験のある教育者、そして日本 NP 学会の役員として、APN を

「これからの医療を切り拓く魅力的な存在」として次世代に繋いでいくための活動を続けていきたいと締めくくられました。

ディスカッション

APN はチームの一員として、大学院教育で培った知識や技能を活かし、課題を予測し回避することで医療現場の質を高めています。しかし、APN がなぜ他と異なる価値を生み出せるのかについては、十分に言語化されていません。今後は科学的根拠を提示するとともに、経験知を言葉にして伝える取り組みを進める必要があると議論されました。

【パネルディスカッション】アウトカムからみた高度実践看護の特徴

森 一直副理事長

（愛知医科大学病院 NP 部・愛知医科大学 看護学部）

「『診る力』と『寄り添う力』を統合する高度実践看護：診療看護師（NP）の実践がもたらすアウトカムとその意義」

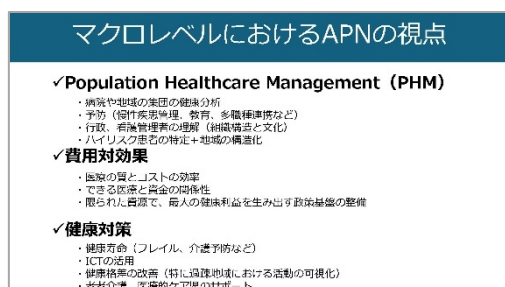
講演要旨

ICU における診療看護師（NP）介入前後の比較研究では、ICU 滞在期間や術後リハビリ開始時期の短縮が有意に認められました。また人工呼吸期間の短縮傾向もみられ、死亡や再入室に差はありませんでした。現在は「診療看護師（NP）がどのような行動をしたことで改善が得られたのか」という行動分析を進めているとのこと。



さらに、Patient Experience（組織文化やシステム、職員の行動によって形づくられる、患者・家族・介護者が医療システム全体を通じて受けるすべての相互作用の総和）を理解して

介入する重要性が述べられました。例えば治療効果が十分でなかった場合でも、患者さんの希望を理解し共に努力することが良い Patient Experience につながるとされました。また、APN には、個々の患者さんへの実践と同時に、システム構築というマクロな視点での役割が求められると強調されました。



ディスカッション

CNS であっても NP 教育課程修了者であっても、最終的な目標は患者さんの安心や安楽であり、共通言語を通じて同じ方向を目指せるとの意見が共有されました。APN は患者さん自身も気づいていなかった本当の希望を引き出す役割を果たしており、それは築かれた人間関係の中でこそ可能になると示されました。

セッションのテーマにあるアウトカムに関しては、「NP 実践の標準化とその患者影響の評価」「良い人生だったと患者さんに思っていただけの看護」「認知機能障害があっても尊厳を守られること」「地域での看護ステーションの特徴を活かした QOL 向上」など、多様な視点が語られました。

【共催セミナー】看護エコーを用いた静脈路の確保とエコー下末梢静脈路院内認定看護師育成の取り組み

三重野雅裕理事

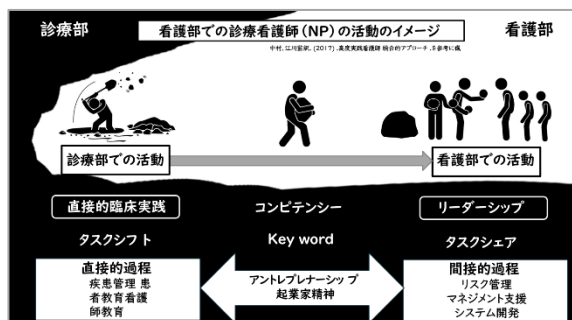
（TMG 横浜支部・医療法人社団伊豆七海会 熱海所記念病院）

前半では、自施設で 2022 年に開始した「eNs 制度（エコー下末梢静脈路確保の院内認定制度）」が紹介されました。特に時短勤務看護師が積極的に取り組むことで、ルート確保困難例に対応できるようになり、やりがいの創出にもつながったとの報告がありました。後半では、ブースに分かれてエコーと血管モデルを用いた実習が行われました。初めてエコーを扱う参加者にも、プロペラの持ち方から



画像の読み方、穿刺の角度まで丁寧に指導されました。さらに、エコー下で針先を見失った場合の対処方法など、実際の練習を通じて生じた疑問に一つずつ回答され、大盛況でした。

末梢ルート確保困難に対応したいというニ



ーズにエコーを組み合わせることは、アセスメント力の強化やケアの質向上に大きく寄与
すると感じられるセッションでした。

報告：学術連携推進委員会